

〈青春の神秘〉の両義性：中原中也とチェーホフ 「黒衣の僧」

中原， 豊
中原中也記念館

<https://doi.org/10.15017/1809195>

出版情報：語文研究. 120, pp.1-13, 2015-12-25. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



《青春の神秘》の両義性

——中原中也とチェーホフ「黒衣の僧」——

中原 豊

1

平成二十五年四月に発見された中原中也の安原喜弘宛と推定される書簡は、チェーホフの小説「黒衣の僧」について独自の視点から語ったもので、中也のチェーホフ受容のあり方や第二詩集『在りし日の歌』の主題を考える上で極めて示唆に富んだ内容をもっている。全文は以下の通りである。

昨夜すっかり忘れてゐました、あんまり簡単ですが、ブルック・ムンクの梗概左に書付けます。

老教授は蒼然たる庭園に腰掛けてゐます。雨上りの、秋

の肌寒い日であります。やがて若い頃のことか回想され始めます。——何か、不思議な、貴重なもの、それを若い頃には持つてゐた。たしかに持つてゐたと思ふのです。それをもし発展させることが出来てゐたら、それはどんなにか人類を益してゐるものかと思ふのです。段々回想してゐるうちに、今にも手にとれさうに見えても来るのですが、而もそれは現はすことが出来ない。

人間理想の幻影は老教授の心境の裡に、ひるがへりまきかへるのですが、そして結局は窮極の諦めの表現をしか完うしはしないのですが、而もその諦めを以て安心立命しきるわけでもないところの、青春の神秘が、こんなにも現実感を以て描かれてゐる作品といふものは、世界に唯一つであります。これは、是非作品を読まれるようおすすめしま

す。作者は茲で主人公であり、また傍観者でもあるのです。あのやうに爽々しい顔付をして、謂はば傍観的な筆法を用ゐた此の作者が、珍しいことに此の作品では、主人公に作者の理想を托するといふ、「美」と呼ばれるもののためには甚だ不利益な道を、一肌脱いで、「今一度、今一度」茲でやつてみてゐるといふ風です、さういふこれは作品です。

筆者は、発見者である神奈川近代文学館の池上聡氏と『新編中原中也全集』編集委員であつた佐々木幹郎氏とともにこの書簡の調査にあたつた。その成果は佐々木氏が「解題チエホフと中原中也 安原喜弘宛（推定・中原中也書簡^{（注）}）にまとめている。原稿用紙四枚にわたつて書かれているこの書簡は、内容から見て五枚目以降が失われており、封筒もないため宛先や日付が不明であるが、安原喜弘旧蔵資料の中から発見されたことから安原宛と推定され、筆跡や内容などから筆記時期は昭和九年後半から昭和十一年十月までと推定される。昭和七年五月から昭和二十八年三月まで明治大学において開講された新聞高等研究科の原稿用紙が使用されているが、中也や安原が同研究科に籍を置いたことはなく、入手経路は不明である。

また、書簡中にある〈ブラック・ムンク〉は“Black Monk”

すなわちチエーホフの小説「黒衣の僧」で、中也が読んだのは秋庭俊彦訳「黒法師^{（注2）}」と考えられる。この点については、筆者なりの考察を付与しておきたい。中也が目にする可能性のあつた同作品の翻訳としては、他に薄田斬雲訳「黒衣僧」、前田晃訳「黒坊主」、中村白葉訳「黒衣の僧」が考えられる^{（注3）}が、第九章の冒頭の一文を比較してみると、次のような違いがある。

コウリンは、大学に独立^{（注4）}の座位^{（注5）}を得た。そして、就職^{（注6）}演説^{（注7）}は十二月の二日と定まり、其意味の告示^{（注8）}は大学の廊下に貼り出された。（薄田訳）

コウリンは独立^{（注4）}講座^{（注9）}を受取^{（注10）}つた。彼の就任^{（注11）}演説^{（注12）}は十二月二日と定められて、その意味の告示^{（注8）}が大学の廊下に掲示^{（注13）}された。（前田訳）

コウリンは大学教授に任命された。その就任式は十二月二日と云ふことに決定され、その報告が大学の廊下に掲示された。（秋庭訳）

コウリンは独立した講座を持つことになった。就任講

演は十二月二日と決定されて、それに就いての告示が大学の廊下に掲示された。(中村訳)

中也是書簡中で同作品の主人公を〈老教授〉と呼んでいる。〈教授〉という言葉を用いているのは秋庭訳のこの箇所のみであり、中也が書簡を書くにあたってこの訳を想起していたことは間違いない。中也の日記に「チエホフの「燈火」を読む。シユアレスを読んでの読後感をチエホフを参照して慥かめるつもりであつたのが如何にも益々五里霧中な気持になる」(昭和11年7月21日)とあり、この「燈火」が秋庭訳の「黒法師」を収録した『チエホフ全集』第八巻をさすと考えられているが、この時が初読であつたかどうかは定かでない。成城高校の国語教師で中也と親交のあつた村井康男は、京都帝国大学の学生でやはり中也と親交のあつた正岡忠三郎に宛てた大正十五年五月六日消印の書簡の中で、中也の消息を伝えながら次のように書いている。

近頃また「黒法師」をよみました。いつかピエロのカフェで「六号室」と何つちがチエホフの本質かなんて問題が出たことがありますね、今なら僕は「黒法師」だと直ぐ云えるやうな気がします。

「黒法師」はタイトルや年代から見てもやはり秋庭訳であろう。直接中也について語っている箇所ではないので、この時に中也もまた同作品を読んでいたとは断言できないが、周辺の人物が同作品を読み高く評価していた事実は無視できない。初読の時期は日記の記述より遡る可能性があると考えられる。

2

「黒衣の僧」は、雑誌「芸能人」一八九四年一月号に発表され同年刊行の『中短編集』に収められた、チエーホフが三十三歳の時の作品である。以後、本稿では秋庭訳にならって「黒法師」と呼ぶことにする。

哲学博士コウリンは、過労のため神経を病み、幼年時代を過ごしたベソーツキイの家で春夏の休暇を過ごすことになる。そこには果樹園を営む養父のイエゴール・セミヨニツテと娘のターニヤがいて、コウリンは二人の敬愛を受け、美しく成長したターニヤに次第に惹かれていく。その頃、コウリンの意識を捉えていたのは、千年前のシリアかアラビアの砂漠を歩いていた黒衣をまとった僧侶の蜃気楼が次々に新たな蜃気楼を生み、その姿が世界各地をめぐる後に地球を脱して宇宙をさまよい、千年後の現代に地球に戻ってくるという伝説

であった。その後、コウリンは実際に黒衣の僧を目撃して次第に会話をかわすようになり、〈あんたは正しく神に選ばれた人と称される少数の中の一人ぢや〉という僧の言葉を信じ、幸福な気分ひたる。

ターニヤと結婚した後もコウリンは黒衣の僧との会話を続けていて、その姿をターニヤに発見されてしまう。自分が〈誇大妄想病〉だと悟ったコウリンは治療を受けて僧の姿を見ないようになるが、平凡な日常を生きる凡庸な自分に苛立ち、ターニヤとの生活を棄ててしまう。

二年後の冬、ワルワラという女性と暮らしはじめていたコウリンは大学教授に任命されるが、咯血のため療養に出かけ、旅先のホテルで再び黒衣の僧と再会する。〈あんたは天才ぢやとわしが云つたのを信じてゐたら、この二年の間、あんたはこんな陰鬱な悲惨な生活を送るやうなことはなかったのぢや〉という僧の言葉に再び自分を天才と信じ幸福感にひたるが、激しく咯血し、ターニヤの名前を呼びながら絶命する。その表情には〈喜ばしげな微笑み〉が浮かんでいた。

こうして「黒法師」のあらすじをたどっていくと、中也が書簡で語っている〈ブラック・ムンクの梗概〉がきわめて特徴的なものであることが浮き彫りになってくる。まず第一に、語られている内容がほとんど末尾の回想場面のみであり、そ

れを〈青春の神秘〉という言葉で表現している点である。黒衣の僧の影はなく、僧が主人公に語った内容は、〈何か、不思議な、貴重なもの、それを若い頃には持つてゐた〉というように、回想の中で触れられているだけである。第二に、作者チエーホフが主人公に直接自分の理想を託した作品と見ていることである。中也のチエーホフに対する言及は、昭和二年の日記から没年の日記まで、数多く残されているが、このような内容のものは他にない。

中年の主人公を〈老教授〉と呼び、冬の回想シーンを〈秋の肌寒い日〉とするなど、原作とのずれも目立っている。先の「解題」で佐々木氏も指摘しているように、この〈梗概〉は書簡を書くかなり前に「黒法師」を読み記憶を頼りに書かれた可能性が高い。逆にいえば、そこに当時から自身が抱いていた創作上のモチーフが入り込んでいて、自らを語っている部分が大きいと思われるのである。

3

まずは「黒法師」末尾の回想場面を詳しく見ておきたい。

彼はターニヤに呼びかけた。美しい花の露に輝いた花園

に呼びかけた。庭園に呼びかけた。毛だらけの根を現はしてゐる松林に、麦畑に呼びかけた。自分の異常な学問に、自分の青春に、勇氣に、享樂に——美しかつた生活に呼びかけた。彼は眼の前の床に大きな血の水溜を見た。そして力が尽きて物を云ふことが出来なかつた。が、云ひやうのない無限の歎喜^{よろこび}が彼の全身に充ち／＼て來た。露台の下の一ばん階下の部屋では夜曲^{セレナード}を奏で、ゐた。そして黒衣の坊さんは彼が天才だつたことを彼に囁いてゐた。彼が死んで行くのは、脆弱な人間の肉体が均整を失つて、最早天才の空しい被衣^{かひぎ}として役立たなくなつたためであることを彼に囁いてゐた。

ワルワラー・ニコラエウナが目を覺まして、衝立の蔭から出て來た時には、コウリンはもう死んでゐた。そしてその顔には喜ばしげな微笑みが浮かんてゐた。

「黒法師」の世界を閉じるにあたって、チェーホフはそれまでに描いてきたいくつかの場面を重ね塗りしている。《花園》《庭園》《松林》《麦畑》はコウリンが幼年時代を過ごしたベソツキイの家の風物であり、冒頭近くでは久しぶりにそれらに接したコウリンが自分の幼年時代を回想する場面が描かれていた。《夜曲^{セレナード}》は人間に理解できない歌声が天国から響い

て來てまた天国へ歸っていくという歌詞をもつもので、コウリンの黒衣の僧との初めての遭遇と最後の遭遇の場面で、前奏曲のように流れていた。このように、コウリンの幼年時代から現在まで、黒衣の僧との出会いから別れまでの時間が、短い回想の中に重層的に描きこまれている。コウリンが最後に呼びかけたのがワルワラーではなくターニヤであつたのも、幼なじみとして夫婦として重ねた長い時間を共有していたからに他ならない。

コウリンが最後に浮かべる《喜ばしげな微笑み》をどのように受けとめればよいだろうか。病跡学の見地からこの作品を論じた高橋正雄氏は、主人公と黒衣の僧との会話は《分裂病に特徴的とされる対話性幻聴》を思わせるが、主人公が黒衣の僧が自分と同じ考えを語っていることに気づいている点、その内容が自己肯定的になつてゐる点が典型的な症例と異なっており、そこに医師チェーホフの作家としての創意を見る。そして、《幻覚が患者に対して持っているアンビヴァレントな性質の（黒衣の僧が「優しいが同時にずるような微笑」をしていることにも、その両義性は暗示されている）、自己肯定的な側面が強調されている》としてゐる。^{（注4）}主人公の《高みの意識》を精緻に分析した秦野一宏氏もまた、それを《生を肯定する微笑》と捉えている。チェーホフは《幻想を避けよ

といった「治療的視覚」からのメッセージ以上のことを語って」おり、そこで〈幻想だと暴きたて、批判し尽くすと、生命そのものが干からびてしまうような、そんな根源的なものとぶつかったのだ〉とするのである。^(注) いずれの見解も、黒衣の僧の幻想を病的なものとして否定せず、そこに肯定的なものを認めている。

絶命したコウリンの顔に浮かぶ〈微笑み〉は、黒衣の僧の幻想がコウリンにもたらしたものの両義性を象徴しているといつていいだろう。幻想と語りながら自らを天才と信ずるコウリンと健康だが平凡な日常をおくるコウリンと、いずれが幸福なのか、あるいはいずれがコウリンの真の姿かと問うならば、簡単に答えることはできない。むしろその両義性こそ、人間という存在の深淵に迫る糸口があるともいえるのである。

4

ここで改めて書簡を見よう。中也が〈青春の神秘〉を語る上で強調しているのは、〈今にも手にとれさうに見えても来るのですが、而もそれは現はすことが出来ない〉、〈心境の裡に、ひるがへりまきかへるのですが、そして結局は窮極の諦めの

表現をしか完うしはしないのですが、而もその諦めを以て安心立命しきるわけでもない〉という部分にある。言い換えれば、「明確に見えているが、表現することができない」「自分の中に湧きあがってくるが、表現することを断念せざるを得ない、しかし断念したままでもいられない」ということになるだろうか。それは〈青春〉の内容というよりも、〈青春〉とそれをふり返る現在の自分との関わり方である。そして、それが両義的な性質をもっているということである。

「黒法師」の全体に視野を広げれば、中也の目にとまりそうな内容は他の箇所にもある。例えば、黒衣の僧がコウリンに語る次のような言葉である。

『では、あんたは、万人が信じてゐる天才の人達で、幻影を見たものはないと信じてをられるのか？ 天才は狂人に近いと今日の学者は云つてをる。健康で、異状のない人間は、普通の凡俗共ばかりぢや。親友。現代の神経衰弱症とか、神経過敏とか、退化とか云ふものを考へて見るが宣い、真面目になつて驚いてゐるのは、生活の目的を現在にのみ置いてゐる人達——詮り普通の凡俗共だけではないか。』

この内容は、人間を天才と俗人とに二分し、天才の中でも最

も強く神を志向する存在として詩人を位置づけた、中也の初期の評論「地上組織」の内容に近い。もしこの評論が書かれたと推定される大正十四年十一月から遠くない時期に「黒法師」の梗概を語ったとすれば、中也はこの箇所に触れないではいられなかっただろう。しかし、それは「どんなにか人類を益してゐました所のもの」へ人間理想の幻影」と遠くふり返るかたちで語られるだけである。

これはむしろ小説「我が生活」に語られる〈自己統一の平和〉の内容に近い。

若し、若々しい言ひ方が許して貰へるなら、私はその当時、宇宙を知つてゐたのである。手短かに云ふなら、私は相対的可能と不可能の限界を知り、さうして又、その可能なるものが如何にして可能であり、不可能なものが如何に不可能であるかを知つたのだ。私は厳密な論理に拠つた、而して最後に、最初見た神を見た。

「我が生活」は、長谷川泰子が小林秀雄の許に去るという大正十四年十一月の失恋体験を描いた小説で、昭和三年後半から昭和四年初頭にかけて書かれたと推定されている。この〈自己統一の平和〉は失恋によって永遠に失われた。その意味で

は書簡にいう〈青春〉の内容により近いのだが、それとの関わり方という点ではまだ違いがある。〈自己統一の平和〉には「明確に見えているが、表現することができない」というような両義的な性質はない。逆にいえば、それこそが〈青春の神秘〉にしかない特徴なのである。

5

佐々木氏は前出の「解題」において、〈青春の神秘〉という言葉が第二詩集『在りし日の歌』の題名にある〈在りし日〉や、詩集冒頭に置かれた詩「含羞」の〈過ぎし日〉に通じていることを指摘し、中也が初期の頃から一貫してもつていた〈過去のふり返し方〉と同じものを「黒法師」のなかに読み取つたとする。『在りし日の歌』の「後記」が〈さらば東京！お、わが青春！〉と結ばれていることも考え合わせれば、疑問の余地のない見解である。

ただし、先に指摘した両義性に着目してみると、〈青春の神秘〉と『在りし日の歌』との別のつながりが見えてくるように思われる。〈今にも手にとれさうに見えても来るのですが、而もそれは現はすことが出来ない〉という表現から直ちに連想するのは、「文学界」昭和十一年七月号に発表された詩「春

宵感懷」である。

春宵感懷

雨が、あがつて、風が吹く。

雲が、流れる、月かくす。

みなさん、今夜は、春の宵。

なまあつたかい、風が吹く。

なんだか、深い、溜息が、

なんだかはるかな、幻想が、

湧くけど、それは、掴めない。

誰にも、それは、語れない。

誰にも、それは、語れない

ことだけれども、それこそが、

いのちだらうぢやないですか、

けれども、それは、示かせない……

かくて、人間、ひとりびとり、

ここで感じて、顔見合せれば

につこり笑ふといふほどの

こととして、一生、過ぎるんですね

雨が、あがつて、風が吹く。

雲が、流れる、月かくす。

みなさん、今夜は、春の宵。

なまあつたかい、風が吹く。

第二連から第三連にかけて、〈溜息〉〈幻想〉と呼ばれるものと詩人との関わり方は〈青春の神秘〉と同様に両義的である。そして、同じ月に「改造」に発表された「曇天」にも両義性をもつ表象が現れている。

曇天

ある朝 僕は 空の 中に、

黒い 旗が はためくを 見た。

はたはた それは はためて ゐたが、

音は きこえぬ 高きが ゆゑに。

手繰り 下ろさうと 僕は したが、

綱も なければ それも 叶はず、
旗は はたはた はためく ばかり、
空の 奥^{おく}処に 舞ひ入る 如く。

かゝる 朝^{あした}を 少年の 日も、
屡々 見たりと 僕は 憶ふ。

かの時は そを 野原の 上に、
今はた 都会の 薨^{きり}の 上に。

かの時 この時 時は 隔つれ、
此処と 彼処と 所は 異れ、
はたはた はたはた み空に ひとり、
いまも 渝らぬ かの 黒旗よ。

この〈旗〉の黒のイメージと時空を超えた不変性は、中也自身も翻訳を手がけているネルヴァルの「黒点」^(注6)にあるもので、「曇天」がその影響を受けていることは明らかだが、ありありと見えていながら手に取ることができないという性質は「黒点」にはない。書簡では触れられていなかった黒衣の僧のイメージも合わせて、その両義的な性質が「曇天」に流れ込んでい^(注7)ると見てよいだろう。これは、生前未発表詩の「月夜と

ポプラ」(昭和10年1月11日制作)の〈捕れないと分つた今晚それは、／なんともかんともありありと見える——〉という〈影〉や、「暗い公園」(昭和11年11月17日制作)の〈その黒々と見える葉は風にハタハタと鳴つてゐた。／仰ぐにつけても、私の胸に、希望は鳴つた。〉という表現などにも通底するイメージである。また、「幻影」(「文学界」昭和11年11月)に登場する〈やさしさうな〉目つきをしたピエロは、〈私の頭の中〉に棲んでいて何かを伝えようとするのだが、その意味はわからない。これもまた黒衣の僧を裏返したような存在であるといえる。

一方で、〈心境の裡に、ひるがへりまきかへるのですが、そして結局は窮極の諦めの表現をしか完うしはしないのですが、而もその諦めを以て安心立命しきるわけでもない〉という表現は、同じ両義性を語りながらも、それに向きあう時の感情の振幅を感じさせる記述となっている。「自分の中に湧きあがってくるが、表現することを断念せざるを得ない、しかし断念したままでもいられない」というような三つの段落をたどるのは、コウリンが黒衣の僧の言葉を受け入れて幸福感にひたるが、ターニヤの言葉を受け入れて健康で平凡な生活に戻り、それでいてその凡庸さにとどまっていられないくなるという過程を反映しているものと思われる。ただし、中也の

語ろうとしていることは、時間軸に沿って物語られる出来事の経緯ではなく、回想の時間の中で同時に生起し揺れ動く感情である。

こうした感情の振幅は「文学界」の昭和十一年十一月号に発表された詩「言葉なき歌」を連想させる。

言葉なき歌

あれはとほいい処にあるのだけれど

おれは此処で待つてゐなくてはならない

此処は空気もかすかで蒼く

葱の根のやうに仄かに淡い^{あは}

決して急いではならない

此処で十分待つてゐなければならぬ

処女^{むすめ}の眼のやうに遥かを見遣つてはならない

たしかに此処で待つてゐればよい

それにしてもあれはとほいい彼方で夕陽にけぶつてゐた

フイトル^{フイトル}の音のやうに太くて繊弱だつた

けれどもその方へ駆け出してはならない

たしかに此処で待つてゐなければならぬ

さうすればそのうち喘ぎも平静に復し

たしかにあすこまでゆけるに違ひない

しかしあれは煙突の煙のやうに

とほくとほく いつまでも茜の空にたなびいてゐた

ここでは〈とほいい処〉にある〈あれ〉に到達するために〈此処〉で〈待つ〉ことを自らに言い聞かせる。それ自体が両義的なのだが、さらに〈おれ〉は待ち続けることができずに過去の回想へと向かつてしまう。再び〈待つ〉ことを言い聞かせるが、最終連ではまた過去の回想へと戻っていく。過去の時間との関わり方としてみれば、ここにも〈青春の神秘〉と同じような両義性が認められるのである。

こうして〈青春の神秘〉の両義性は、書簡では触れられなかった黒衣の僧のイメージをも取り込みながら、「春宵感懷」「曇天」「幻影」「言葉なき歌」といった詩の中に形象化されており、それらが詩集『在りし日の歌』の中で大きな位置を占めているのである。

そして、両義性の問題を考える上で最も重要なのが、佐々木氏も取りあげている「含羞^{はうちゆう}」である。この作品は「文学界」

昭和十一年一月号に発表され、『在りし日の歌』に収められる際に詩集と同じ副題を付されて冒頭に置かれた。いわば詩集全体の主題を示すと見られる一篇である。

含羞
はぢらひ

——在りし日の歌——

なにゆゑに こゝろかくは羞ぢらふ

秋 風白き日の山かげなりき

椎の枯葉の落窪に

幹々は いやにおとなびイチちゐたり

枝々の 拱くみあはすあたりかなしげの
空は死児等の亡霊にみち まばたきぬ
をりしもかなた野のうへは

あすとらかんのあはひ縫ふ 古代の象の夢なりき

椎の枯葉の落窪に

幹々は いやにおとなびイチちゐたり

その日 その幹の隙ひま 睦みし瞳

姉らしき色 きみはありにし

その日 その幹の隙ひま 睦みし瞳
姉らしき色 きみはありにし

あゝ！ 過ぎし日の 仄燃えあざやぐをりをりは
わが心 なにゆゑに なにゆゑにかくは羞ぢらふ……

詩篇冒頭の〈なにゆゑに〉という問いに答えるように浮かん
でくる情景は、子どもの目に捉えられた自然の風景であり、
その中に〈死児等の亡霊〉や〈古代の象の夢〉といった時空
を超えた存在も描き込まれている。そして、その核ともいえ
る存在が幼い恋の相手とおぼしき〈きみ〉である。それらは
〈枝々〉、雲を意味するものと思われる〈あすとらかん〉、〈幹々〉
という視界を遮るものの向こうにあって、鮮やかでかつ隔たつ
た感じを与えている。(注8) こうした情景は「黒法師」末尾の回想
場面における情景描写に遠く響くものを感じさせる。

佐々木氏は最後の二行に〈青春の神秘〉と同じ語り口やリ
ズムを見ている。(注9) 筆者なりに言い換えれば、それもまた両義
性にかかわっている。〈過ぎし日〉が〈仄燃えあざやぐ〉ほど
に、問いは〈なにゆゑに なにゆゑに〉と深まっていくので
ある。

羞じらいという情感そのものもまた、快と不快とのあわいに
あって両義的である。言語学者の丸山圭三郎氏は、〈羞恥の

もつ苦痛と快楽のアンビヴァレンツ」をもたらしものを（ノモスの自我の崩壊であると同時に潜在的自我の解放」と説明する。「含差」^{はらひ}最終行の問いの深まりは決して絶望や混迷ではなく、「過ぎし日」の情景から遠く隔たった現在の自己をゆさぶり、その内に潜む何かを呼び覚まそうとするような積極性を有しており、詩集『在りし日の歌』全体の主題にも関わる問いだともいえるだろう。

*

チエーホフの「黒法師」における両義性と中也が語る〈青春の神秘〉における両義性、そして『在りし日の歌』の個々の詩篇や詩集全体の主題との関係を考察すべき段階に來ているが、与えられた紙数も尽きた。それは、先に指摘した第二点、中也が「黒法師」の主人公にチエーホフ自身の理想が託されている点と併せて、別の機会に論ずることにした。

注

- 注1 「中原中也研究」第18号 平成25年8月
注2 『チエーホフ全集』第8巻「燈火 外七篇」（大正13年7月 新潮社）
注3 「チエーホフ翻訳作品目録」（「翻訳と歴史」——文学・社会・書

誌」第39・40合併号 平成20・7 ナタ出版センター）によれば、書簡の筆記時期の下限である昭和十一年十月頃までに發表された「黒衣の僧」の翻訳は以下の六種である。

- ① 薄田斬雲訳「黒衣僧」（『太陽』10・13・14 明治37年10月・11月）
② 大内白月訳「ゴブリン博士」（『文庫』37・6 明治41年9月）
③ 前田晁訳「黒坊主」（『チエーホフ集 短編十種』大正2年1月 博文館）
④ 秋庭俊彦訳「黒法師」（前出）
⑤ 中村白葉訳「黒衣の僧」（『チエーホフ全集』第9巻 昭和10年4月 金星堂）
⑥ 秋庭俊彦訳「黒法師」（『チエーホフ傑作集』（昭和11年11月 新潮社）
①は中絶しており、⑥は④とはほぼ同一のテキストなので考察の対象としなかった。
注4 「黒衣の僧」にみる対話性幻聴」（『日本病跡学雑誌』47 平成6年5月）
注5 「チエーホフと狂気——「黒衣の僧」をめぐる」（『海保大研究報告 法文学系』42・1 平成8年）
注6 「ノート翻訳詩」に草稿が残れており、「社会及国家」昭和四年十月号および「紀元」昭和八年十二月号に發表された。最終形は以下の通りである。
黒点 ジェラール・ド・ネルヴァル／／誰でも太陽をジツと視た者は／目の前を、自分の周囲を空氣の中を／鉛色の斑点が飛ぶのを見る。／／そのやうに、私がまだ若くて横著であつた頃／一度光榮の上に目を見据えたことがあつた。／すると黒点は

注 7 私の貪慾な目に留るのであつた。／／以来、すべての物に喪の
徴号の如く、／私の目の停る所^{とどまる}に、／その黒い斑点を私
は見る。／／どうしたことだ、何時も何時も！ 私と幸福との
間に／一羽の鷺が——不幸なこつた 不幸な！——／性慾りも
なく太陽と光榮とを視守つてゐる。

郡伸哉氏は「チェーホフにおける世界遍在志向と空間——「黒
衣の僧」と「かもめ」の〈自己空間〉」（『中京大学教養論叢』31
—2）平成2年）において、黒衣の僧が〈全宇宙を歩きまわつ
ている〉ことに着目し、そこに〈世界偏在志向〉を指摘してい
る。

注 8 拙稿「『含羞』論——〈在りし日〉の隔絶性について」（『語文研
究』54 昭和57年12月↓『群像日本の作家15 中原中也』平成

3年6月 小学館）
「山小屋便り」93 「青春の神秘」という言葉」（『みすず』56—6

注 9 平成26年7月 みすず書房）
『言葉と無意識』（昭和62年10月 講談社現代新書）206頁

注 10

（なかはら ゆたか・中原中也記念館）